

児童文化財としての「人形劇」教材研究指導

—幼児の言葉の発達に着目した領域「言葉」科目での実践報告—

中野真樹

1. はじめに

人形劇は、演劇分野での児童文化財として代表的なものであり、保育現場においても広く上演され、親しまれている。そのため保育者養成校に在籍する学生にとってもその成り立ちや教育的意義を学び、さらに実際にさまざまな人形を用いた人形劇の実演ができるような技術を習得することは有用であろう。人形劇を含めた演劇は、「総合芸術」と呼ばれ、美術、造形、音楽表現、身体表現、言語表現といった多分野にわたる表現方法を用いて一つの舞台を作り上げるのが特徴である。そのため、それを学ぶ学生にとっては難しいと感じられる面も多くあることが予想されるが、自ら企画し、制作した人形劇を上演することは自身の総合的な表現力の向上につながるという教育効果が期待される。そこで、領域「言葉」科目のなかで言語表現を中心とした多角的な表現法の習得という観点から、人形劇に関する学習および、実際の上演を行っている。その際の問題点や課題を整理しつつ、人形劇を授業でとりあげることの意義をまとめたい。

2. 保育者養成校における人形劇演習について

人形劇が上演されてきた歴史は古く、日本でも伝統芸能として人形芝居が行われてきた。保育の場においては金城(2009)によると、1923(大正12)年頃幼稚園教育の場で、教育者倉橋惣三と当時の保育者らによる人形劇上演の記録が残されているという。それ以降多くの幼稚園へと広がりを見せ、今日では人形劇は重要な児童文化財の1つとして認知され、多くの保育の場で実践されている。熊田(2009)、熊田(2010)の調査によると、保育士の多くが保育現場における人形劇の実践の重要性を認識しており、約半数の保育士が実際に人形を所有していることが明らかとなった。しかしながら、人形劇にはやや大がかりな舞台が必要となり、演者の人数確保や練習時間の確保の難しさから、また人形劇の演じ方に関する迷いなどから、十分な上演回数が確保できない現状があるということも、アンケートから示されていた。これをうけて熊田(2013)では、保育現場での人形劇のさらなる普及のために、人形劇

に関する理解を深め、実際に人形制作し、それを使った演技の指導を行う研修の有効性について述べている。そして、人形劇を演じられない、演じ方を知らないという保育士が若年層に多いことを示し、それは保育者養成校において人形劇に関する知識は得る機会があるものの、実践する場が不足したまま、保育の現場に出てしまったという可能性を指摘している(熊田 2013:76)。

熊田の指摘するように、学生が就職後保育の場で人形劇を鑑賞し、実演する機会も多くあるものと考えられる。保育者養成校において人形劇に関する基礎的な知識を得、そのうえで人形劇上演のための基礎的な技術を習得しておくことは有用であろう。そこで、本学では領域「言葉」科目である「保育内容・言葉」において人形劇を中心とした演劇論および人形劇に関する演習を行っている。このような保育者養成校における人形劇指導に関する先行研究として、4年生大学保育士養成課程での人形劇実習指導に関する考察である、向平ら(2007)がある。人形劇団員による指導のもと、1人で上演可能な人形劇を学び、その成果を実習時などにこどもの前で披露するという保育課題の実践例の紹介となる。舞台人の指導のもとで人形劇を学び演じることで、保育技能の上達につながり、こどもの心理を汲み取れる保育者の育ちへとつながることが示唆されている(向平ら 2007:48)。また、米谷(2008)では、養成校において人形劇を学び、実際に実習等の活動のなかで演じた学生の手記を分析し、学生の多様性・個性を尊重しつつ保育技術の向上をはかるなかで、人形劇を鑑賞するこどもたちの反応に気付き、よりいっそう深く理解しようという意識が学生の中に芽生えてくる様子が述べられている。これらの先行研究では人形劇に関する知識と技術の習得および、保育の現場での実践の両面の重要性が指摘されている。以下で、本学における人形劇学習のそのとりくみと課題について紹介したい。さらに、後段で実際にこども達の前で演じるとりくみについても紹介した。

人形劇について学ぶ「保育内容・言葉」は保育士免許・幼稚園教諭免許を取得する学生が全員受講する。「人形劇」といっても、手遣い、棒遣い等のさまざまな種類があり、保育の場でよく用いられるペープサートやパネルシアターも広い意味では人形劇のなかに入るが、ここでは人形劇とは、「パペット人形(片手遣い人形)」を用いたものを指す(ちなみに、パネルシアター・ペープサート・手袋人形といった広い意味での人形劇と関連するものに関して、学生はすでに1年生科目「言語の表現技術」で学んでいる)。実際に使用する人形として、学校備品である東光産業株式会社「ゆびにんぎょうシリーズ どうぶつセット ・ 」を使用する。(図1)

【図1】 東光産業株式会社「ゆびにんぎょうシリーズ どうぶつセット」



しかし、ここで用意されているものはほとんどが動物造形であり、人間など他のキャラクターを学生が使用したい場合は、別途制作することもある。

この科目において人形劇を取り上げる意義として、こどもが人形劇を鑑賞することで言葉の発達につながる点があげられる。先で紹介した保育の場における人形劇実践の先駆者であり伝道者である倉橋惣三の談として、幼稚園談話会講演録である倉橋(1930)を引用したい。(引用にあたって、旧字体を新字体にあらためた)

人形劇を見てゐる子ども心の動きはどうか。その第一はいふまでもなく、立体表現の満足です。之れは「おはなし」が、どうかすると筋を平面的に辿り易いのと較べて、著しい特色をなします。第二は、創造活動の活発さです。事件の筋、すなわち地を語らないで、人形の動きとせりふだけでゆくのですから、想像をはたらかさずには見てゐられません。つまり、一切が直接説話法だけでやるのですから、話の地の全部を想像に委せる所に人形芝居の特殊な意義があるのです。

(倉橋 1930:23)

倉橋は、地の文による状況の説明が一切なく、会話と人形の動きから想像して自分なりにストーリーを追っていくという人形劇の特色を「創造活動」として評価する。このように「会話」から「ストーリー、話の筋」を組み立てることで、言葉や話をよく聞く態度や、言葉の豊かさを育てていくことが人形劇鑑賞には期待できる

と言えるだろう。人形劇を含む演劇は、さまざまな芸術分野を集積した総合芸術であると言われている。脚本は文芸であり、背景は絵画芸術といえる。小道具や衣装、人形は造形表現分野である。演技は身体表現となり、BGM や劇中歌は音楽表現である。つまり、人形劇の舞台を作り上げるためにはさまざまな技術が必要であり、領域「言葉」科目では補いきれないものも多くある。しかしながら、こどもの発達という面からみると、人形劇の鑑賞はこどもの言葉の生育に大きく寄与するものであり、そのような観点から人形劇にとりくむことを学生に求めている。

また、「保育内容・言葉」は2年生後期科目、つまり最終学年の、就職の直前に履修する科目となる。人形劇の演習はそのなかでも、学期最後の保育課題となる。2年間の学びの集大成の場として、それぞれの学生の得意分野を活かし、総合芸術である演劇作品を作り上げることの意義があろう。人形劇は、授業4回にわたってとりあげる。4回の流れを以下にまとめた。

- (1) 児童文化財としての人形劇についての講義、人形の動かし方の説明
- (2) グループごとのねらい・テーマの設定、脚本の作成
- (3) 模擬保育に向けての指導案作成、背景・小道具等の作成
- (4) 模擬保育「人形劇」

授業1回目は、講義となり、児童文化財における人形劇の位置づけ、保育の場の人形劇の役割、総合芸術としての人形劇の特色、舞台装置や演劇用語についての解説を行った後、封筒人形や手袋人形をパペット人形に見立てて歩く・走る・うなずくなどといった動作の練習を行う。2回目から、グループに分かれての学習となる。それぞれのグループに異なる年齢月齢のこどものもとでの活動を想定し、こどものことばの発達に関するねらいを設定する課題を伝え、そこで設定したねらいや、年齢、季節等にあわせた演目を話し合って決定し、脚本を作成する。この時、学生の多くは、絵本を人形劇の脚本に書き換えることを選択する。地の文と会話文がはっきりと分かれていることも多い絵本を、会話でストーリーが展開していく人形劇へと脚本を書き換えを行う際には、こどもが聞いて人形の動きとあわせて理解し、話や言葉づかいを味わえるように注意しなければならない。オリジナルのストーリーを作成するグループについても、対象となるこどもが見て、聞いて理解でき、楽しめる脚本作りとなるように指導する。また、2回目終了後から、空き時間や放課後を使い各自で人形劇の練習を開始する。3回目では、人形劇を保育の活動の中に組み込む想定で、人形劇を主活動においた部分指導案を作成する。これは次回の模擬保育の際の指針となるため、グループで話し合い、導入からまとめまでを計画する。

それが終わったグループは、人形劇で使用する背景幕や小道具等を作成し、可能であれば通し稽古なども行っている。4回目は、「保育内容・言葉」のなかでも最終授業となる。各グループが作成した指導案に基づいて模擬保育という形式で人形劇を発表する。このとき、次の発表順となる他のグループがこども役となり、それ以外の学生は人形劇をやる保育者とこども役の学生を周囲から観察し、模擬保育終了後に振り返りを行っている。このとき、学生同士が感想や意見を言い合い、人形の動き、セリフを言う時の声の大きさ、トーンなどの工夫を行っていく。(図2)

このように領域「言葉」科目において人形劇を取り入れることが、就職後にも積極的に人形劇を保育の場で披露するきっかけとなるだろう。また、劇を行うにあたり、声を使った表現力を身に着けたり、絵本を脚本に書き換える際には、地の文と会話との違いなどに着目し、言語そのものへの洞察を深めていくことができるだろう。そして言葉を中心としたこどもの発達の過程を予測し、その年齢に適した言葉や表現を選び、上演するという保育技術の獲得にもつながっていくことが期待される。今後の課題としては、授業内では人形劇の上演は模擬保育にとどまり、実際にこどもの前での披露が難しく、こどもの反応を直接確かめたり、保育における人形劇の有用性を実感するまでには至らないという点がある。また、人形劇の導入がはたして就職後の保育技術の充実につながっているのか、という点については実証的な調査を行っていない。卒業生に追跡調査を行うなど、この人形劇指導の効果については、今後調査をしていきたい。

【図2 授業での学生の人形劇発表の様子】



3. こどもの前での人形劇の実演

前章で、領域科目「言葉」の授業内での人形劇指導について述べてきた。その中で、実際に人形劇を学んだ学生がこどもの前で披露できないという点について、課題であると述べたが、一部の生徒のみにとどまるが、学校行事においてこどものまえで人形劇を披露するという試みをおこなっているのです、ここで紹介する。

(1)サークル活動としての人形劇

本学演劇部は、筆者(領域「言葉」科目担当)が演劇部顧問をつとめており、定期的に人形劇の練習を行っている。演劇サークルには1年生と2年生が所属しており、いずれの学生も2年生後期から開講される「保育内容・言葉」受講に先立ち、人形劇について学んでいく。また、授業時の人形劇発表についても、演劇部所属の学生が核となり、学生の中心として演技についてのアドバイスをする場面等も見られる。演劇部の一番大きな活動の場は、毎年10月の末に行われる学園祭での公演である。本学の学園祭は毎年地域のこどもたちを招待し、いままでの保育の学びを活かした展示やゲーム、舞台を準備し、こどもたちに楽しんでもらう場を提供している。2016年10月28、29日に行われた学園祭では、演劇部が「おおきな おいも」「まいごの うさぎさん」という、それぞれ絵本から発想を得た人形劇をこどもたちの前で披露した。(図3)

【図3 学園祭屋内ステージでの人形劇披露】



(2) 「子育てルーム」での人形劇

本学附属機関「こども研究センター」主催により、地域支援・子育て支援の一環として毎年、公開講座「子育てルーム」が開催されている。2016年は10月17日「第3回子育てルーム」において、学生スタッフによる人形劇を行った。これは、演劇部の学生と有志の学生による発表で、あった。この日の子育てルームのメインテーマは「いもほり」であり、そのテーマにあわせて、人形劇も動物たちが大きないもを協力して掘り出すという「おおきな おいも」という演目で上演をした。(図4)

【図4 「子育てルーム」での人形劇の様子】



これらのこどもたちの前で人形劇を上演する試みについては、直接反応が分かるという点に学生たちは大きなやりがいを感じている様子がうかがえる。こどもたちが、動物の人形が登場するたびに指をさして「ぞうさん!」「うさぎさん!」と口々に名前を呼び、人形が退場する時には手を振って別れを惜しむ姿が観察できたり、人形劇が終わったあと動物たちをもっと近くで見たいと、思わず舞台に近寄って中を覗き込もうとするこどもの姿を目の当たりにし、保育の場で人形劇を演じることの楽しさ、重要性をあらためて理解することができる。一方、課題もあり、演劇部所属学生、「子育てルーム」学生スタッフは人形劇を学ぶ学生のうちの一部にとどまり、全員の学生がこどもの前で人形劇上演ができるわけではない。そして、これ

らの学校行事はどちらも特定のこどもを対象にしたものではなく、さまざまな年齢のこどもが鑑賞することを前提にするため、こどもの言葉の発達に着目してねらいを定めた演目を決定することが難しくなっており、「多くのこどもに楽しんでもらえるような人形劇」という目的で上演されることが多く、領域「言葉」科目である「保育内容・言葉」での人形劇学習との連携を深めにくいという点がある。また、「学園祭」「子育てルーム」というその場限りでのこどもたちの関係性のなかでの上演となるため、保育園、幼稚園といった継続的な保育の場での上演とは状況が異なる点も理解しておかなければならない。そして「保育内容・言葉」は2年生後期の最後の課題となるため、2016年は学園祭、子育てルームともに、すべての学生がまだ人形劇について授業で学ぶ前に、こどもたちの前での披露となってしまいう点が課題となった。今後さらに、学びとこどもたちの上演との関連を密にしていく必要があるだろう。

4. おわりに

これまで、領域「言葉」科目において、こどもの言葉の発達の観点からみた児童文化財としての人形劇の重要性、保育者養成校における人形劇の技術習得の必要性、そして総合芸術である演劇としての人形劇を上演することで、学生自身の言語表現技術や、言葉への洞察力の向上が期待されることといった理由から人形劇の知識と演技演習を行ってきた。その実践報告を行い、課題についてまとめ、また実際のこどもたちの前での上演のとりくみについても紹介をし、今後の課題を示した。今回は紹介と報告のみにとどまったが、これらの試みが、学生の今後の職業人としての保育者の視点の育成にどれだけ寄与しているか、という点については追って調査が必要となるだろう。また、人形劇についての学習をする前とその後で、こどもの言葉の発達に関する理解がどれだけ深まったのか、明らかにしていかなければならない。また、学校行事の一環としてこどもの前での人形劇の披露についても、保育技術および保育者の視点両面の育成にかかわる有効性について、実証的に示して行きたいと考えている。また、なんども繰り返すように演劇は音楽・美術・文芸・身体表現などといったさまざまな分野にまたがった総合芸術である。領域「言葉」科目のみならず、他の領域にもまたがった、複合的な視点で学生が人形劇について学び、上演する必要もある。多領域の教員との連携を今後は図っていきたいと考えている。

最後に、人形劇の実践には多くの専門的知識をもつ保育者のチームワークが重要となってくる。同年代の保育者をめざす学生が集う養成校という場で、集中して人形劇について学び、学生同士で協力しながら一つの舞台を作り上げていくことは、

貴重な経験となることだろう。一方で、短期大学の学生は非常に多忙である。2年間という短い間で、さまざまな課題をこなし、実習を行い、アルバイトやサークル活動を行っている。人形劇の練習も授業内だけですべてを行うことは出来ず、空き時間や放課後に自主的に集まって練習をしなければならない状況があり、練習時間の足りなさを嘆く学生もいた。学生にとって安心して精一杯学べる環境を整えることも、養成校の職務として今後検討していかなければならないだろう。

引用文献

金城久美子(2009)「倉橋惣三と人形劇——幼稚園教育への導入と目的に関する一考察——」『幼児教育史研究』2009年4巻 pp.13-27

熊田武司(2009)「保育士における人形劇の実践について()——岐阜市内の保育所(園)に勤務する保育士を対象にした調査から——」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』41 pp.87-99

熊田武司(2010)「保育士における人形劇の実践について()——岐阜市内の保育士を対象にした人形劇に対する意識調査から」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』42 pp.69-79

熊田武司(2013)「保育教材としての人形劇の普及方法——岐阜市保育教会研修会の参加保育士を対象にした調査から——」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』45 pp.65-78

倉橋惣三(1930)「人形芝居の話——幼稚園談話会講演の大要筆記」『幼児の教育』30(6) pp.18-23

向平千絵・棚橋美代子・米谷淳(2007)「保育学生に対する人形劇の実習指導に関する一考察」『大學教育研究』16 pp.33-50

米谷淳・棚橋美代子・向平千絵(2008)「保育者養成における人形劇の活用——丹下進の人形劇指導——」『京都女子大学発達教育学部紀要』4 pp.29-39